

現代のことば

やまだ
山田 奨治



「ところで、あなたはいつノーベル賞を取るの？」この季節になると、毎年のように妻がいう。もちろん、軽い冗談のつもりなのだろう。だが彼女のことばは、国民やマスコミとして教育・科学行政が、研究者という職種に向けている視線そのものだともいえる。

だが、情報学のように戦後の世界を大きく変えた分野も、文化研究や歴史学といった、ますます重要性を増している分野もノーベル賞にはない。文学賞の背後に隠れた翻訳者の力や、平和賞が持つ政治性も、以前から取りざたされている。ノーベル賞は学問の評価尺度として万能ではない。

科学の国境

う目標を掲げた。日本の科学技術政策を左右する力を持つ会議が出したにしては、見識を疑いたくなる目標だった。「ノーベル賞はオリンピックピックではない」と、野依良治博士が痛烈に批判したことも記憶に新しい。

アルフレッド・ノーベルの遺言には、「授賞にあたって、候補者の国籍は考慮しないこと」とある。人類に貢献した仕事を成し遂げたひとを、国の枠を超えて称えることが、ノーベルの遺志だった。それがいつのまにか、国家を単位にした受賞競争になってしまった。今回の受賞者のなかでも、南部陽一郎博士と下村脩博士が日本人なのか、下村博士とともに化学賞に選ばれたロジャー・チェン博士は中

国人か米国人かと話題になった。とかく世間は、科学に国境線を引きたがる。

科学に国境線ができてしまったことには、科学者たちも加担している。(日本発) (純国産) (オール・ジャパンの態勢) といったことばを使えば、国からの補助を得やすくなる。将来の収益が見込める分野なら、特許料収入を当て込んだの(科学の罫い込み)に拍車がかかる。

科学に国境はないという理想は、もはや過去のものなのだろうか。科学のように普遍的な営みに国境を引きたがるのは、国家主義と新自由主義に毒された行いだらう。科学や学問は公共のものだ。世界の英知を集めて研究すること、その成果は罫い込まれるものではなく、人類に広く享受されるべきもの、という理念を科学者には捨ててもらいたくない。

かつてイギリスのケンブリッジに滞在していたときに、地元科学者がノーベル賞を受賞した。しかし、新聞もテレビもその事実を短く淡々と伝えただけだった。日本では、受賞者の生い立ちから私生活までメディアに暴かれる。それと比べたら、イギリスのメディアは大人だと思った。日本人がノーベル賞を取ったからといって、マスコミが大騒ぎしているようでは、幼稚な国民とみられてもしかたあるまい。

(国際日本文化研究センター准教授・情報学)